

FADO

20

Outubro 1998

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

①

月田秀子の昨日、今日、明日

仕事を楽しみ、休暇も楽しみ…

黒田清

北海道帯広(観客320名)、釧路(観客350名)両公演とも、大好評。終演後のサイン会で、打ち上げで、聴衆の熱さが伝わってくる。帯広でのサイン会の時、二十歳過ぎぐらいの女性の、「始めて聴きました。よかったです。」という瞳に、あふれてきた涙。おもわず抱き締めて一緒に泣きたい衝動に駆られる。辛うじて両の手を握りしめ。かろうじて涙を押さえ。

手作りの、心の通ったコンサート活動のできることの喜びをしみじみと味わった旅だった。美味しい空気と、酒、肴と併せて、月田は、いつになく元気に帰路につく。

釧路の日中の気温17度、大阪の最低気温にも追いつかない涼しさではありましたが、コンサート会場の熱気たるや、クーラーが追いつかず、観客も音響、照明のスタッフ、ギタリストも、私も、グショグショの汗だく。夏を締めくくるにふさわしいコンサートと相成りました。翌朝、釧路港を散策。ドックには、かもめの白い羽がたくさん落ちていた。街も、かもめも来たるべき厳しい季節を前に、澄んだ空に輝く太陽を精一杯ため込んでいる様に見えた。雪に閉ざされ、零下20度にもなる冬の厳しさを知っているからこそ、彼らは、あんなに熱くなれるんだなと思った。不夜城の様に、闇もない都会に住む者が失っているものを何となく教えられた様な旅でもあった。

釧路では、「平成古寺巡礼」で一緒した長倉洋海氏のご両親が、お花をもって駆け付けてくれた。穏やかで地味なその容貌に、氏のあの人柄の暖かさがうなずける思いがした。

池側、野上両ギタリストの手が、故障中。野上曰く、「まあ、手が駄目だったら、口があるよ。ズンチャ、ズンチャ、ベンベン」。くれぐれもご自愛下され。私を生かすも殺すも、あなた方次第なのです。

初代の愛用ワープロが故障。父が見かねて最新のワープロを贈ってくれた。なんとパソコン機能が付いていて、インターネット通信ができる。谷口君が、さっそく、ファド倶楽部のホームページに掲載板を作ってくれ、それが結構にぎわっている。

電話嫌いの私にはうってつけの代物だ。ファンとの交流が広がり、また深まり、ファン同士の交流もしかり。

9月29日、「月田秀子 Dramatic Fado Live Vol.2」では、朝から仕込まれた小さな舞台空間に、大根役者魂がむくむく頭をもたげ、宮沢賢治に扮した竹崎利伸氏の力の入った朗読に、触発される様に歌った。年末の三都公演へのヒントをたくさんもらった様な気がする。

様々な人との出会いの中で、月田は、少しずつ、ファド歌いになってゆく。「オウチガ、ダンドトオクナル。」

月田秀子

八月は、広島原爆の六日に大阪府池田市で「戦争と人権」、敗戦の日の十五日には群馬県前橋市で「戦争と教育」と、戦争にかかわる講演が二つできた。通天閣の「戦争展」には、昨年は元従軍慰安婦・黄錦周(ファン・クムジュ)さんを招いて貴重な体験談を聴くことができたが、今年は準備する余裕がなく「黒田ジャーナル」としての協賛行事はできなかった。しかし、初日(七月二十五日)と最終日(八月二日)には例年通り挨拶ができた。

昨年は八月二十四日の群馬・粕川村での集い、二十五日の山形市での「非平和を考えるシンポジウム」から帰阪したあと、黄疸症状が出て入院、九月、膵臓ガンの手術をしたのだから、あれからほぼ一年、また元気に仕事ができるようになって、ありがたいことだ。特に、戦争と平和にかかわる講演は、これからも一生続けていきたいと思っている。インド・パキスタンの核実験、日米安保の新ガイドライン、私たちの周囲は、決して平和とって安穩としていられない状況にある。

形だけにせよ、平和が続いていくのは結構なことなのだが、目を凝らすまでもなく、私たちは非平和的環境の中で生きている。

非平和といえば、私たちの日常生活もそうなのだ。三年前の阪神・淡路大震災、一昨年の一〇一五七事件。昨年の神戸の少年Aの事件。そしてこの夏は和歌山の毒入りカレー事件。みんな私たちの社会の中の亀裂を浮き上がらせる。戦争がなくても平和でない社会。そんな社会がどうしてできてしまったのか。それはみんなが共生できない差別的な生き方をしているからなのだ。だから戦争に反対するなら非平和に反対しよう。非平和に反対するなら差別に反対しよう。こうして戦争反対と差別反対とは連動する。

八月は、そんなことを考えさせる月だったが、それと同時に、これからさらに体力をつけるために、休暇をとる月でもあると、自分に言い聞かせて、お盆前の二日間、淡路島へ行って来た。息子と娘の車に十二人が分乗しての家族旅行だが、なにより嬉しかったのは、その二日間、疲労感が全くなかったことである。ホテルのプールで久しぶりに泳いでみたら、病前と同じようにとまでいかなかったが、手足の筋肉もそこそこに動いてスイスイ泳げたのだ。体重は十数キロ軽くなったままだが、これが少しずつ増えてくればしめたもの。体に注意しながら、病後二年目もいろんな仕事とときどきの休暇を楽しみたい。

(『窓友新聞』1998年8月号「もぐらのたわごと」より)

●会長の黒田清氏が日刊スポーツ(名古屋以西)で連載しているコラム「ニュースらいだー」が三千回を迎えるのを機に、三冊の本にまとめられることになりました。10月10日、近代文芸社から出版されます。連載のタイトル通り、ニュースにまたがって「昭和」から「平成」にかけての時代を書いてきた「ニュースらいだー」。本になるのは、「平成」以降の十年間の記事で、『平成を撃つ』『震災以後』『少年Aの時代』の三部作。(近代文芸社TEL 03-5395-1199/各1785円)

私と北海道、そしてファド 月田 秀子

私が初めて北海道を訪れたのは、20年ほど前の秋の始めである。北陸若狭湾の敦賀港から31時間、日本海の荒波に揺られ、夜の明け始めた小樽港に降り立った時、私の足下にはまだ舟揺れが残っていた。小樽から札幌へ向かう列車は、行商のおばさんたちで占められていた。向かいに座った一人の老婆が、私に握り飯を差し出した。浅黒く日焼けしたその顔に深い皺が刻まれていた。「あれ、たった一人できたのかい」彼女たちの屈託のないおしゃべりと笑い声に、旅の緊張が一気にほぐれていく様だった。「息子は、殺されたよ、とうの昔のことさ。あんたぐらいの歳の頃。」明けてゆく車窓の向こうの海を見ながら、その老婆はつぶやいた。列車の騒音と、いわせれた行商の女達のおしゃべりに、かろうじて聞き取れたその言葉は、愛するものを失ってもなお生きてゆかなければならない人間の悲しさを教えてくれるのに十分だった。札幌の駅につき、ホームの階段を上る時、私は、さらに驚いた。さっきの老婆が小さな体の背中にうずたかく荷物を背負い、首には、大きな包みをぶらさげて一段一段と上ってゆく姿だった。首に下げたその包みが、ゆっくり揺れていた。「おばさん、私にも少し持たせて」その言葉は出口を失い私の心の中でどンドン膨らんでゆく。「これが私の生活さ。あんたは、旅人、いい旅をしておいで」彼女の後ろ姿は、そう言っている様だった。北の国に生きる人の、強さと悲しさを思った。

今年の3月、北海道での初めてのコンサートの為に札幌を訪れた。道路の脇にはうずたかく真っ黒になった雪が残っていた。会場へ向かうタクシーの運転手に「北海道の冬は、大変でしょうね」と言った時帰ってきた言葉が忘れられない。「だからいいんだよ。春が待ち遠しくて。北海道の春は、すべてのものが生まれ変わった様に生き生きと動き始める。木々も、花も、人もね。」

ファドは、ポルトガルの港町リスボンの貧しい人達が身を寄せ合って生きている裏町で生まれた唄である。ファドの心は、サウダーデという言葉に象徴される。それは、遠く離れてある故郷、別れた人、成就しなかった愛、もう会えなくなった人、取り戻せない過去、失くしてしまったもの、そうゆう人や物に寄せる思いである。懐かしくも、やるせなくも、いたたまれない様な、身を焦がすような思い。その思いをファドに託して歌い、聴くことによって、その悲しさを乗り越えてゆく。それは、生きてゆくために名もなき人達が生み出した知恵でもあるのかもしれない。人生に傷つき、孤独で悲しい思いをしているのは、決して自分だけではないのだ。一人一人はファドを通して、悲しみを共有する。そして自らの運命を受け入れる。ファドという言葉は、運命という意味でもある。

20年前にあの列車で出会ったおばあちゃんを思って、歌いたいときりに思う。

ファドは生きていることの『叫び』、そして失ったもの達、遠くにあるものへの『折り』そんな熱い思いを、ほんの一時でも、聴いてくださるあなたと共感できたらと思う。

(北海道新聞用原稿)

ficção

読切連載 秀子のエピソード帖[その14] 内間 天馬

秀子の恋 結婚しない(出来ない)理由

「わたし秀子、このリスボア第七惑星に移住してきてもう三年目なの。新型呼吸器の性能もすごくいいし、ピック人もリユート人もベース人もペンサキ人も、皆とっても親切だし、お酒も美味しいし・・・」。この惑星一番のバー『サウダーデ』でファドを歌っている秀子は、この星での生活にいたく満足しているのであった。

ご承知のように今や誰も住めない人類のふるさと地球では、二十世紀以降、核施設事故の多発や環境汚染など、人知では制御できぬまで進み、人類も放射能に加え未知の細菌などの影響を強く受け、肉体的変形が当たり前になっている。ギターを引き続けた結果、指がピックに変形したピック人、リユートに惚れたあまり、顔がリユートの形に変形したリユート人、コントラバスを抱き続けた挙句、体型がベースになっちゃったベース人など・・・それ以前の地球では、宗教・民族的主張の違いなどが争いの主因であったが、三十九世紀の今日、人種、民族のカテゴリーはまったく意味をなさず、肉体的特徴によってナニナニ人と表現するに至っている。このリスボア第七惑星に移住した人類も多種多様な肉体的特徴を持っているが、全員に等しく共通するのは《でべそ》だということである。恒久平和願望を標榜しつつ、なおも争いを止めない愚かな人類に対し、神がすべての人類に共通する肉体的変形という形而下の事実でもって反省を迫ったといえる。ちなみに《おまえのカアちゃん、でべそ〜》という二十世紀の子供たちにポピュラーであったのしり言葉は、《ガイジン》と言う言葉とともに、もはや死語になり、第二百版以降の広辞苑にも出ていない。

「ところで、わたし恋してるの。プロポーズされたの、ウフッ。とってもステキな彼よ。ハンサム人なの。でも、でもわたし、結婚できないの・・・」。結婚という言葉に、一瞬、その大きな瞳が曇ったようである。その彼氏、ハンサム人のジェームス・ディーン氏は、この惑星最大のベリジャーショップチェーン店のオーナーである。

おっと、皆さんはベリジャーをご存じない。二十世紀の人類にはベリジャーは無縁であったが、この三十九世紀の人類にとっては必需品である。へそ、つまり、ベリーボタン用のブラジャーがベリジャー。すべての人類が、いまや《でべそ》であるからして、このベリジャー、要するに《でべそパッド》は必要不可欠なのだ。ディーン氏はこのベリジャーに初めてアートを施した芸術家として、その名声は轟いている。ディーン氏の店のキャッチフレーズも有名である『ディーンベリジャー、ベリーグッドジャー』

噂をすればなんとかで、そのディーン氏が、この『サウダーデ』にやってきたようだ。どういう訳か悲壮な顔つきをしている。

「秀子ちゃん、今夜こそ返事を聞かせてくれ。ぼくは君がいなければ生きてゆけないのだ。結婚してくれな」

「ディーン様、あなたの気持ちはよくわかります。とても嬉しゅうございます。でも、でも、あゝ、でもでも・・・ワァ」。でもでもでもと泣き崩れる秀子であった。

「秀子ちゃん、ディーンはんのヨメになったら、そらええでえ。なんちゅうても毎日毎日きれいなベリジャー着させてもらえるで。わいなんか、このベリジャー、買ってからもう七年もしっぱなしや」と、薄汚いFサイズのベリジャーを見せるベース人のショー氏。リユート人のサノ氏やピック人のチュー氏、ペンサキ人のクログダ氏やイツキ氏なども「ええ縁談やで」と説得を試みる。

「わたし、だめなの、ど、どうしても結婚できないの、ワーツ」床に泣き伏す秀子であった。

とうとう、全員一斉に秀子を問いつめる。

「秀子ちゃん！理由を言ってみなはれ。皆で力になるで！」

「わ、わたし、で、で、でべそじゃないの！ワーツ」(完)

皆とおなじ人生でなくてもエエよね、秀子大師.....



cartas

次回の『Dramatic FADO Live Vol.3』に期待

＜インターネットファド倶楽部掲示板から＞

9月29日のライブには参加できないと思っておりましたが、会場へ連絡すると電話予約でチケットが入手出来ました。それも前売価格で・・・

仕事を定時で切り上げいそいそと京阪電車に乗り関目のSTIRへ6時30分に到着。受付で早速¥2,500を支払い7時の開場まで暫しの休憩・・・そして7時に入場。7時30分の開演まで、猫の額のようなステージの舞台裏やセットを見ながら待つ事30分。

鐘の音のSEが入り場内は薄闇くなり月田さんがステージへ・・・続いてSLの音と共に宮沢賢治に扮した案内人の竹崎氏が黒いコートに黒い帽子をかぶり古ぼけた革のトランクを持って登場。

挨拶、そして詩の朗読と情感溢れる言葉で最初の唄『私の憂い』を紹介。薄闇いステージのバックの紗がホリゾン照明で赤く染まった前に月田さんの黒いシルエットが浮かび上がる。

曲が始まり薄明るい照明に照らされた月田さんが唄い始めると、初めて聴いた時の印象が瞬間に脳裏をかすめ、と共に少し目頭が熱くなるのを覚えた。唄が終わると場内は感動と緊張に包まれている様で、他の人々と同じように小生も拍手をするのを暫し忘れ、少し遅れて起こった拍手に急かされるように拍手を送ることになった。

その後、2曲3曲と進み、案内人の時には激しく時には穏やかに進められるアプローチは次の唄への予感と期待を呼び、次々と唄う月田さんの情感溢れる唄と表情とが、とても素晴らしく絡みあい何とも言えない時間と空間に身を委ねることになる。それは此れまでにない感動を覚えさせてくれた。ワインを呑み乍ら聴くライブと違った時間と空間は、どんな大きな素晴らしいステージよりもきっと、聴くものに感動を与えずにはおかないだろう・・・

今回、このライブに参加出来たことは、月田秀子のFADOの世界がもっともっと深いものであることを認識させられたように思える。そして、多くの夢と期待が広がっていくことが感じられる・・・

最後の曲『難船』が終わると長く大きな拍手が湧き起こり、案内人の最後の言葉『此処からが始まり・・・』で締めくくられた。

そう此処からが始まり・・・過去に引きずられずに思い出し、今日を生きる喜びの糧とし、明日を生きるために今日を大切に生きる。全てを前向きに捕えることがFADOの心だと思う・・・

喜びと感動の余韻に浸り、次回の『Dramatic FADO Live Vol.3』に期待しながら一人STIRを後にした・・・

ボキャブラリーが少ないためライブの感動をうまく伝えられませんが、ライブに参加した人々は今夜は旨い酒を呑み気持ちよく眠れることでしょう。

ちなみに小生は淀屋橋から梅田まで歩き新地で見かけたギネスパブでギネスを2杯・・・1杯は月田さんに、もう1杯はこの企画をしてくれた方々に・・・小生はそのおこぼれで乾杯！！

(1998.9.29) 清水幸治

ギネスと早速の投稿ありがとう。ほっと胸なで下ろし、一日過ごせました。演者は反応に飢えているのです。それ次第で、生きたり、死んだり、元気になったり、落ち込んだり・・・賢治役の竹崎氏もしかり。新たな出会いに感謝。

(1998.9.30) 月田秀子

投稿拝見。創り手側冥利につきます。只、只、感謝、感謝。スタッフ一同を代表して私めより、ご返杯。

そして、「おこぼれ」どころか、心を込めて共に、乾杯。
(1998.9.30) 坪倉謙之

vamos cantar!

暗き宿命

歌詞 Caldo Verde

なんと呪わしいさだめにあるの 私の心よ
お互い こんなにはぐれてしまって

私たちは 押し殺した二つの悲鳴
めぐり会えない 二つの運命
結ばれることのない 恋人どうし

お前のせいで 私は苦しみ死んでゆく
お前と離れて 私はどうしたらいいのかわからない
わけもなく 愛したり憎んだり
心よ いつになったらあきらめがつくの
私たちの失った望みに
いつになったら止まるの 心よ

この葛藤と苦悩の中で
私は喜びに歌ったり泣いたり
幸せだったり 不幸せだったり
お前はなんと悲運なの 私の胸よ
決して 満たされることはないのね
すべてを与えてしまって 何もありません

凍りついた孤独
心よ お前のくれたものはこれだけ
命でもなく 死でもない
それは 透明な狂気
わかっているのに変えられない
私の運命

MALDIÇÃO

LETRA: ARMANDO VIERA PINTO
MÚSICA: ALFREDO DUARTE MARCENEIRO

Que destino ou maldição
Manda em nós, meu coração
Um do outro assim perdidos
Somos dois gritos calados,
Dois fados desencontrados,
Dois amantes desunidos.

Por ti soffro e vou morrendo,
Não te encontro nem me entendo,
Amo e odeio sem razão...
Coração, quando te cansas
Das nossas mortas esperanças?
Quando páras, coração?

Nesta luta, nesta agonia
Canto e choro de alegria
Sou feliz e desgraçada
Que sina a tua meu peito
Que nunca estás satisfeito
Que dás tudo e não tems nada

A gelada solidão
Que tu me dás coração
Nem é vida nem é morte
É lucidez, desatino
De ler no próprio destino
Sem poder mudar-lhe a sorte

informação

- 月田秀子のコンサートのポスター、チラシのデザインをして下さっている山口道夫氏の個展が下記のように開催されます。
会期:10月26(月)~11月7(土) ※日、祝日休み
会場:大阪・本町「ESPACE446」TEL 06-245-0446
- 12月2日「三裕の館」のライブは三都公演のリハーサルの為、お休みさせていただきます
- 12月からの京都「巴里野郎」のライブは毎月最終木曜日のみとなります。
- 10月からの「アートクラブ」でのギターは野上圭三さんに変わります。長い間、月田秀子を支えてくださった佐野健二さんありがとうございました。

<月田秀子のスケジュール>

- | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------|
| 10月3日(土)京都/京北町「The Hook & Line」 | *問合せ TEL 075-921-2928(中小路) |
| 7日(水)大阪・西中島南方「三裕の館」 開演 8:00 | *問合せ TEL 06-304-1745 |
| 16日(金)島根/松江市「プラバホール」 スミセイライフミュージアム「五木寛之 生きるシリーズ」 | |
| 17日(土)岸和田「岸城神社」 午後7時~8時すぎ | *問合せ TEL 0724-22-0686(岸城神社) |
| 22日(木)神戸/山本通り「T2楽屋」 北野ローズガーデン2F 6:00 開場 7:00 開演 | *問合せ TEL 078-242-5888 |
| 26日(月)大阪/心斎橋「アートクラブ」 (1)8:00~3回ステージ(入れ替えなし) | *問合せ TEL 06-253-0827 |
| 29日(木)京都/四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 (1)8:00 (2)9:00 (3)10:00(入れ替えなし) | *問合せ TEL 075-361-3535 |
| 30日(金)京都/四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 (1)8:00 (2)9:00 (3)10:00(入れ替えなし) | *問合せ TEL 075-361-3535 |
| 11月4日(水)大阪・西中島南方「三裕の館」 | *問合せ TEL 06-304-1745 |
| 7日(土)長野「小諸ユースホテル」 開場 18:00 開演 19:00 料金 前売 3,500円 当日 4,000円 ワンドリンク付 当日、ユースホテルへの宿泊も可能(3200円) | *問合せ TEL 0267-23-5732 |
| 12日(木)長崎/伊王島「ルネサンス長崎 伊王島 ラルゴホール」 | *問合せ TEL 0958-21-4889 |
| 16日(月)大阪/豊中市役所「市民ロビーゆうゆうコンサート」 豊中市役所第二庁舎1階ロビー 12:05~12:50 | *問合せ TEL 06-858-2525文化課 |
| 21日(土)神戸/阪急 御影「マリールイス」 | *問合せ TEL 078-842-5522 |
| 26日(木)京都・四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 | *問合せ TEL 075-361-3535 |
| 27日(金)京都・四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 | *問合せ TEL 075-361-3535 |
| 30日(月)大阪・心斎橋「アートクラブ」 | *問合せ TEL 06-253-0827 |
| 12月3日(木)東京・新宿「シアターアプル」 | *問合せ TEL 06-345-5062 (サンケイ企画) チラシ参照 |
| 5日(土)大阪・桜橋「サンケイホール」 | *問合せ TEL 06-345-5062 (サンケイ企画) チラシ参照 |
| 14日(月)大阪・心斎橋「アートクラブ」 | *問合せ TEL 06-253-0827 |
| 19日(土)長野・場所未定 | *問合せ 月田秀子ファド倶楽部 |
| 22日(火)名古屋「愛知芸術劇場小ホール」 | *問合せ TEL 052-833-4330 (スタジオ白象)チラシ参照 |
| 24日(木)京都・四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 | *問合せ TEL 075-361-3535 |

<編集後記>

集中豪雨と台風の隙間を縫うように、コンサート活動は、無事続行。室生寺の五重の塔もさる事ながら、稲、りんご、蜜柑と精魂込めて育てられた農作物の被害の様に、心痛の思い。水害などは、天災だけでは片付けられない。毎日大量のゴミを無造作に出している自身を振り返り、せめてできる事からやっこうと思いはするのだけど。年末の三都公演のチラシ作成上発送が遅れたことを深謝。黒田会長には、いつでも投稿引き受けるよといわれました。次号をお楽しみに。(月田)

月田秀子ファド倶楽部 ホームページ

<http://www.osk.3web.ne.jp/~fh/index.htm>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第20号
- 1998年 10月 1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町 2-10 エヌケイビル 502号
- TEL&FAX 06-765-4808